

はじめに

貝島桃代、ロラン・シュトルダー、井関 悠

20世紀の近代化により、日本の社会は大きく変化した。工業生産性の急激な上昇により、人々の生活には豊かさをもたらされるとともに、建築や都市計画では専門化や分化が起きたが、この発展は、近年建築家らによって見直されようとしている。

一方で、建築のドローイングは、空間を概念化し、組織化し、構築する伝統的ツールの役割を担ってきた。それは建設プロセスの指示書であるだけでなく、批評的フィードバックループにおいて、建築を記録、議論、査定する創造的装置ともいえ、民族誌のように、人からそうでない事物までさまざまな主体による利用や要望、思いを詳細に記録しうるものでもある。そして個人的でありつつも、シェアされグローバル化する現代社会の環境においては、共有化しうるデザイン・アプローチともなっている。

第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館で開催される「建築の民族誌 (Architectural Ethnography)」展は、大学の設計スタジオ、建築設計事務所あるいは美術作家の実践から生まれた、設計詳細図から空間と活動の連関図、ハイブリッドな都市環境図、自然災害後の農山漁村の大規模調査など、過去20年間、世界各地の42作品を取り上げている。すべての作品がドローイングをめぐる新たなアプローチの探究を映し出している。

展示スペースでは、「of : について」「for : のための」「among : とともに」「around : のまわり」といった英語の前置詞に代表されるような建築との関係性を軸に作品が展示される。地上の屋台や家具が置かれた広場は、議論や休憩、勉強、食事、打ち合わせ場所として利用できる。

本書は本展のカタログであり、作品とともにキュレーターによる3本の論考を掲載している。貝島桃代は「建築の民族誌」のコンセプトを紹介し、ロラン・シュトルダー (Laurent Stalder) とアンドレアス・カルパクチ (Andreas Kalpakci) は建築ドローイングの意義と役割を探究し、井関 悠はアート・ドローイングの建築的な潜在力について検証している。本書では展示作品の主要部分を抽出し編集している。各作品の最初の見開きでは、紹介文とともに、「建築 (A)」と「民族誌 (E)」の対話からドローイングの読み方を、次の見開きでは、建築と暮らしを伝える主要なドローイングを示すことで、42作品を紹介している。